「歴史情報学」から「情報歴史学」への展開－自問自答－

柴山 守：大阪市立大学学術情報総合センター

「人文科学にとってコンピュータは単なる道具か」－このテーマをめぐり、最近電子メールによるホットな議論がある。「ラディカルな内容だ」、「単なる道具にすぎないのだ」、いや「『人文科学にとってコンピュータはどのように役立つか』がよい」…等々である。これは平成１０年５月に開催される情報処理学会（会員数約3万名）のフロンティア領域の合同研究会におけるパネル討論のテーマとして提案されたもの。勿論「人文科学とコンピュータ」研究会もこの領域に属している。この＜人文科学＞を＜歴史＞に差し替えたらどうなるだろうか。

重点領域研究「沖縄の歴史情報研究」プロジェクトに参加させていただく機会となったのは、平成4年のことだと記憶している。ある研究会での席上、岩崎先生から協力してほしい旨のお話があった。その後、平成5年には準備活動が始まった。「大量に集積した画像データをどのように蓄積し、提供するか」、「電子ファイリングシステムかマイクロフィルムか..」など大変興味深いテーマに接することになる。準備活動を含め、約5年は早くすぎた。この5年間、主にマイクロフィルム版琉球史料集成のためのマイクロフィルム画像検索システムの開発、『歴代宝案』に関する構文解析や検索システムの開発、外字処理方式に関する検討、最近では『琉球産業制度史料』の語彙索引を作成することに携わっている。

さて、この5年間の自らを振り返ってみると、情報学の立場から歴史の研究資料を対象にして情報の蓄積、加工、提供等々の「仕組み」について研究してきた。別の言い方をすると「歴史情報学」と言えるであろう。まさに「沖縄の歴史情報研究」における一つの目的が琉球・沖縄関連史料・情報の蓄積と流通を目的にした「仕組み」の研究ということだから当然とも言える。他の研究分野や研究者に反響のあったマイクロフィルム画像検索システムは、その代表的な例でもあろう。

ところが一方、「情報歴史学」という立場があるのではないかということを学んだ。例えば、テキスト検索のGrep機能を利用して、史料間におけるテキストの異同を分析すること。もう一歩進んで、ある仮説に基づくモデルをコンピュータ上に表現し、関連史料のコンピュータ処理によって検証、あるいは実証する研究はできないかということである。『歴代宝案』は文の構造に一定の形式があるようだ。だとすれば、この構造をコンピュータ上で表現し、すべての文書に対する検証を進めることによって、新たな発見や知見が得られるのではないか－これはまさに歴史学の世界であろう。＜情報＞を＜コンピュータ＞に置き換えると「コンピュータ歴史学」ということになる。「コンピュータ民族学」が登場し、最近では国文学の分野においても「コンピュータ国文学」が生まれている。何かしら共通しているものがあるように思える。

冒頭に述べた「歴史にとってコンピュータは単なる道具なのか」－私は「単なる道具だ」と思っているが、情報を扱う道具として見る限り、相当に役立ち、歴史の研究方法にも大きな影響を与える。そして、この5年間学んだ「歴史情報学」から、今後一歩進んだ「情報歴史学」への道が展開されるのではないだろうか。少し大げさに言うとパラダイムが変わると言うことになるかも…。自らは、そんな「情報歴史学」を夢見ている。